

<ラウンドテーブル報告4>

初年次教育の効果をどのように測るか

— 量的・質的アプローチの現状と課題 —

- 【企画・司会者】 小島佐恵子（北里大学）
【報告者】 山田剛史（島根大学）
 笹金光徳（高千穂大学）
【指定討論者】 佐藤広志（関西国際大学）
 小島佐恵子（北里大学）

1. 企画趣旨

初年次教育に取り組む誰もが直面する課題の一つに、自身の実践が学生の学びにいかなる効果をもたらしているか、そしてそれをどのように測定するかということがある。

今回は、この効果の測定に焦点を当て、島根大学と高千穂大学の2つの事例を基に量的・質的アプローチの課題を探り、その最適解と今後の可能性を議論することを目的とした（小島）。

2. 報告①: 初年次教育の授業デザインと効果の最適解を探求する—量的アプローチから

初年次教育の効果を一律に評価することは難しい。第1に、学生が有する広義の学力の高低、それを踏まえて授業実施主体が想定する目標（スキルの習得、専門教育への橋渡し等）、そしてその基盤となる学問分野（教養/専門）の差異といった背景文脈の多様性を考慮しなければならないという点。第2に、先述の定量評価や定性評価に加え、「本当に効果があったのか」をメタ的に捉えなければならないという点、評価の多次元性あるいは汎用性の問題である。さらにその効果の汎用性をどのような指標で捉えるのかという問題も存在する。本当に初年次教育の授業もしくは授業群を通じて培われた知識・態度・技能が、他の授業や高年次に転化されるものなのか。こうした視点を意識しながら実践と知見の蓄積を行っていく必要がある。

本報告では、筆者の所属する教育開発センターが、全部局での初年次教育プログラム導入を推進するために実施した2つの異なる目的（顕在的 or 潜在的）・内容（スキルベース or 知識ベース）・形態（協調学習）で構成される初年次教育授業を対象とした（授業の計画・実施・評価は同僚の森氏との Team Teaching 方式で行っている）。具体的には、筆者が授業担当・責任者として全学部1年生を対象に行った共通教養科目（「現代大学論—大学を知り、大学で学ぶ—」「スタートアップセミナー」（いずれも前期・半期開講））で、2008年度の受講生は前者が37名、後者が22名であった。両授業に対して、授業開始時と授業終了時に同種のアンケート（大別すると、入学形態（不本意か否か）に関する項目、授業観・学習観と学習行動に関する31項目、アカデミック&ソーシャルスキルに関する18項目の内容で構成）を実施し、時系列の縦断比較（1次分析）と授業間の横断比較（2次分析）を行った。そして、プレテストの結果を元にグループ構成してラーニング・コミュニティ形式で行ったことによる上記量的指標の差異を検討した（3次分析）。なお、本報告（量的調査）の限界については、定性的観点に焦点を当てた午後の森・山田の報告の中で補った。その上で、量的手法による効果測定の効果と限界、今後の展開の可能性について問題提起を行った（山田）。

3. 報告②:全学的な初年次教育を通して

本報告では、週1コマ(90分)の全学必修通年科目「ゼミI」とその担任によるアドバイザー制を中心とした高千穂大学の初年次教育について、評価・効果という側面を中心に現状を紹介し、調査結果を報告した。

本学では、①大学へのスムーズな接続、②スタディ・スキルの獲得、③課題探求型学習の実践、④キャリア意識の醸成、の4つの目的にそった到達目標にバランス良く取り組むことで学生自身の「気づき」(自己認識)を喚起しよう、という基本コンセプトに基づいて、年間を通じさまざまな授業内容や施策が展開されている。入学直後のフレッシューズオリエンテーション(一泊研修)は、目的①を主眼として実施される。通常授業では、春学期は「読む・書く・聴く・話す」といった基本的な目的②が中心である。秋学期は、さらにこれらを発展・活用する目的③が中心的授業内容となっている。また、目的④については、春学期に行われるキャリアアセスメントとそのフォローアップの実施、一般教養力増進のための反復テスト(=ガンバレ高千穂)の授業内での実施が中心である。さらに、担任との授業内でのかかわりや面談を通して、4つの目的への補強とこれらを統合して得られる「気づき」への喚起がなされている。また、アドバイザー制の下で学生自身の目標の明確化と自己管理能力の向上を支援するために、「高千穂マスタープラン」と「学生生活目標管理シート」からなる一種のポートフォリオシステムを導入し、活用している。

以上の取組の各パーツがいかに効果的に機能し、全体が初年次教育プログラムとして有効に行われているかを検証するには、これによって個々の学生が入学時に比べ目的①~④をどの程度達成し、成長を遂げたか、ということを確認できればよいが、容易ではない。

ゼミIの成績は、授業への取組姿勢と課題の評価を30%、出席点を40%、全クラス共通

の課題の点数を20%、ガンバレ高千穂への取組を10%として総合的に評価することがシラバスに明記されており、「初年次教育プログラムによる成長度」というよりは、各学生の取組姿勢と課題提出時点での能力を強く反映する。確かに、目的②や③の効果は、アチーブメントテストや研究発表の評価シート等により、ある程度定量的な測定が可能であるが、目的①と④に対する成果を定量化することは難しい。また、ゼミIで掲げられている授業目標の多くは、大学4年間で継続的に完成度を高めるべきものであり、1年終了時に如実な効果が現れなければ、安易に「内容・方法に問題あり」と断定するのは早計である。他方、目標管理シートでは、「自ら目標を設定(P)、行動(D)し自己評価・反省(C)、目標の修正(A)」というサイクルを繰り返す。担任はアドバイザーとして、振り返り時(C→A)にコメントを寄せるものの、学生の記述内容が直接成績評価に反映される仕組みにはなっていない。本報告で、目標管理シートから得られる情報も含め、初年次教育の効果を検証するための手がかりについてある程度の情報提供ができたと考えている(笹金)。

4. 議論の展開

2つの事例によって、効果測定の具体的なイメージは高められたと考える。それを受け、指定討論では、学習者の初期条件の違い、効果発現時機のずれ、効果の持続性、評価者の視点の多様性等といった評価の根本的な課題から、自己評価の揺らぎの捉え方、学生へのフィードバックの方法等、実践上の課題に至るまで、議論のポイントを提示した。

フロアからは、そもそも量的・質的アプローチがどのような課題を孕んでいるかという説明や、効果測定をめぐるこれまでの議論の整理が足りず、論点が広がりすぎたことが指摘された。この問題には、丁寧かつ継続的に議論を積み重ねる必要がある。学会での知見の蓄積を経て、再度検討したい(佐藤,小島)。